

## 流通実験を通じてみた地域通貨の有効性と課題に関する考察：箱崎地区におけるケーススタディ

和久田，昌裕  
九州大学大学院人間環境学府都市共生デザイン専攻修士課程

出口，敦  
九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門

<https://doi.org/10.15017/20667>

---

出版情報：都市・建築学研究. 5, pp.41-47, 2004-01-15. 九州大学大学院人間環境学研究院都市・建築学部門  
バージョン：  
権利関係：



## 流通実験を通じてみた地域通貨の有効性と課題に関する考察 —箱崎地区におけるケーススタディ—

### Issues on Community Currency System Reviewed through Its Implementation Test —Case Study in Hakozaki Area—

和久田昌裕\*<sup>1</sup>, 出口 敦\*<sup>2</sup>

Masahiro WAKUDA\*<sup>1</sup> and Atsushi DEGUCHI\*<sup>2</sup>

“Community Currency System” is a popular topic as a tool which might be effective for revitalization of a declined community and society all over the world as well as in Japan. There is no standard for successful implementation because the applied system should be custom made based on the social and cultural context of each of the community. This study aims to research on the effectiveness of the system and construct application model for revitalizing the declining commercial district. As a case study, the previous practical use test was done in the target area including Kyushu University Hakozaki Campus. Through the case study, this study verify the problems to be solved for implementation of the system, and suggest a unique implementation model for the area.

**Keywords :** *Community currency system, Community, Revitalization, Social Experiment, Commercial street*  
地域通貨, コミュニティ, 活性化, 社会実験, 商店街

#### 1. はじめに

##### 1.1 研究の背景

###### (1) 地域通貨導入の増加

近年, 日本全国の各地域や地域コミュニティにおいて, 地域通貨が耳目を集めている。2003年10月現在, その実践例は報告されているものだけで全国で369例を数え, 昨年の同時期(134例)と較べて約3倍に増加した<sup>1)</sup>。また, 更に多くの地域で導入が検討されており, 今後も地域通貨の導入事例は増加する傾向にあると考えられる。

地域通貨の導入事例が増加している背景としては, 我が国の長引くデフレ不況で深刻な経済状況にある地方商店街や地域経済団体が, 地域経済活性化の一助として導入を検討する経済的背景と, 現代の多様化した個人の価値観やライフスタイルにより, 日本人が古来より築き上げてきた地域コミュニティが崩壊しつつあるという問題に対し, コミュニティ再生ツールとしての地域通貨への期待, という社会的背景があげられる。

###### (2) 地域商業活性化実例の不足

上述のように経済的, 社会的に地域通貨に対して

の期待は大きいと言えるが, 現状において地域通貨の成功例は乏しく, 期待や話題が先行しているという印象は否めない。特に経済的背景における要請である地域商業の活性化という課題の解決に, 明確な形で寄与した事例は皆無と言っても過言ではない<sup>2)</sup>。

###### (3) 地域通貨への期待

その理由としては, 日本における地域通貨の多くがボランティアやNPOの活動と連携して発展してきたことが考えられる。商業的利益を優先する地域商店主や事業主にとって地域通貨は, 逆説的ではあるが現在のように明確な成功事例が見られない状況を考慮すると, 特に優先的に取り組むべき事業であると認識されなかったことは当然である。

しかしながら, まだ地域通貨という概念が地域のまちづくりにおいて一般化してから5年足らずという状況で, 地域通貨には経済的な効果は期待できないと断じてしまうことは早計であると考えられる。

大規模商業施設にはない地域商店街の魅力として, 地域コミュニティを土台とした「あたたかさ」や「安心感」といったものがあげられ, そのコミュニティの関係を強固なものにする地域通貨を戦略的に用いることは, 地域商店街にとっても経済的なメリットをもたらす可能性は十分にあると考えられる。

\*1 都市共生デザイン専攻・修士課程

\*2 都市・建築学部門

また、地域通貨には、確実に成功をもたらす普遍的なモデルが存在するわけではなく流通する地域やコミュニティの特性によって、その形状や使用対象、流通の仕組みなどが異なる。地域通貨を経済学的見地から捉え、現行経済との違いや世界中の事例をまとめたものは、非常に多くの既往研究や文献等として発表されているが、実際の商業地域の中でまちづくりのツールとして地域通貨のモデルを提案する例は少ない。

## 1.2 研究の目的と方法

そこで、本研究では、地域通貨のモデル構築を、実際の商店街といった地域商圈をフィールドとして行い、今後全国各地でも応用されることを想定した地域通貨事業のリーディングケースとして社会実験を実施し、そのモデル構築と社会実験のプロセスにおいて得られた問題点や課題を検証し、実用化に反映させることを目的として進めている。

本論はその初期段階の社会実験の成果について、考察を加えまとめたものである。本論で扱っている研究目的と方法は下記の通りである。

### (1) 全国の地域通貨事例の類型化・分析

今後、流通実験に使用する地域通貨のモデルを決定するため、世界各地で導入されている地域通貨の事例を整理し、その長所および短所を明らかにし、地域特性ごとの地域通貨のモデルを整理する。

### (2) 実験対象地域の実験モデルの構築

次に、実験対象地域の現状や問題点、行われている取り組みなどを評価し、分析する。分析で得られた知見をもとに、実験対象地域に最も適すると思われる地域通貨の形状、流通の仕組みなどのモデルを構築する。

### (3) 流通実験（社会実験）の実施

実験期間を定め、実際に対象地域で流通実験を行う。実験前にワークショップなどを行い、参加者の認知度の向上と人数の確保を進め、実験終了後にはヒアリングやアンケートなどを通じて、参加者の意見や意識の変化などを調査し、課題点を分析する。

### (4) 実験結果を通じた課題の分析

流通実験から得られたデータをもとに、構築した地域通貨モデルの有効性を検証し、改善を要する点を明らかにする。

## 2. 地域通貨について

### 2.1 地域通貨の定義

地域通貨とは、ある特定の地域内、もしくはコミュニティ内に限定して流通する価値を持った媒体のことである。欧米では「community currency」もしくは「local currency」と呼ばれ、全世界で約

3,000以上の実践例があるとされている。

わが国においても、1999年5月、NHK 衛生第一放送で放送された「エンデの遺言～根源からお金を問う」で地域通貨が紹介され<sup>3)</sup>、番組に触発された多数の地域、グループが地域通貨の実践に取り組み始めるようになり<sup>4)</sup>、それ以降に毎年ほぼ倍増するペースで増えつづけた結果、現在ではその事例数は350を超えるまでに至っている。

### 2.2 地域通貨の機能

地域通貨と性質上、対を成す概念は円やドルなどの「法定通貨」であるが、その法定通貨には一般に、  
①財やサービスの価値を一定の尺度で表す評価機能  
②財やサービスの交換を円滑にする交換機能  
③一定の価値を時間をおき維持・保存する貯蓄機能  
④通貨を他者に貸し付けることにより、通貨そのものが商品としての価値を持ち、利子を生む増殖機能の4つの機能を持つ。<sup>2)</sup>

地域通貨の特徴は、以上の機能のうち評価機能と交換機能に特化している点である。国家により半永久的な価値を保証されている法定通貨と異なり、限られた地域内で財やサービスと交換されることでのみ価値を表現することが可能な地域通貨は、長期における時間軸で価値が維持されることは、ほとんどの場合において想定されていない。

また、法定通貨のように利子という概念を持たないことで、あたかも通貨自体が商品であるかのように扱われることを未然に防ぎ、貨幣が局所的に偏在し、貧富の差が拡大することを回避する。言うなれば地域通貨は、法定通貨の持つ貯蓄機能と増殖機能を敢えて廃することで、貨幣の流動性を加速し、自由な流通を活発化させることを狙いとしている通貨であると言える。

### 2.3 地域通貨の効果

現在、世界中で地域通貨の導入が進む背景として、以下の2つの効果が地域通貨に期待されている<sup>2)5)</sup>。

#### (1) 経済的効果: 顧客の囲い込みと地域経済力確保

地域通貨は、特定の範囲内で経済的なブロックを形成することに加え、その範囲内で自発的な取引が活発化すると考えられ、近年停滞している地域経済活性化の起爆剤として期待されている。

また、犬の散歩や買物の宅配サービスなど、通常の経済活動では潜在化してしまう行為を、地域内の経済活動として顕在化させることで、地域内の未利用資源を活用することが可能となる。

#### (2) 社会的効果: コミュニティの再生や自己実現

上記の犬の散歩などのような行為は、人と人の間に生まれる「信頼」に基づいた行為であり、現代の経済社会ではとかく軽視されがちで、豊かなコミュニティの形成、新たな人間関係の構築など、経済的指標では図ることのできないコミュニティの活性化という効果も期待される。新たに生み出された「信頼」を基盤として次から次へと地域通貨による、財・サービスの交換が発生し、互酬的な交換が促されることになる。

また、自分に何ができるのかを考えることは自己実現の手段として有効である。現行の経済社会の中での自己実現は、突出した技術がないと評価されにくい。地域通貨を用いる場合、多様化・細分化された自己実現が可能となる効果が期待できる。

## 2.4 地域通貨の事例と分類

対象地域における地域通貨のモデル構築に先立ち、世界各地で展開されている既往の地域通貨<sup>(1)</sup>の形式を整理し、類型化<sup>(4)(6)</sup>することで、モデル構築の参考とする。既往の地域通貨をその流通形式によって整理すると、以下の3種類に分類することができる。

### (1) クーポン発行形式

商品券やお札のように、一定の額面の入った紙券などを媒体として扱う形式である。取引が単純であり、コミュニティに属していない者の参加も容易である反面、流通量の管理、偽札対策などを考慮する必要がある。

### (2) 口座変動形式

参加者同士が、それぞれの口座を記録した通帳、もしくは小切手などを所持しており、口座上での通貨のやりとりによって、決済が完了する形式である。残高がプラスの場合とマイナスの場合とあり、全ての参加者の残高を合計するとゼロになる。決済自体は容易であるが、全ての取引の管理を行う事務局などの存在が不可欠となる。

また、取引が活発になってきた場合に通帳を無くす者などが現れると残高の総額が大きく変わってし

まうこともある。

### (3) 借用証書形式

個人が借用証書という形で地域通貨を発行することができ、それを受け取った者は別の取引の決済時にそれを支払う。自分の発行した地域通貨は時間を経て自分の元に戻ってきた際に、始めに自分が受けたサービスの返済とともに流通を終えるというシステム。個人が自分の信用の範囲内で自発的に通貨を発行するため、紙幣発行形式のように流通の管理を行う必要がなく、通帳管理形式のように残高を管理する必要もない。

## 2.5 地域通貨の単位

地域通貨の通貨単位は、その地域やコミュニティによって自由に決められており、千葉市の「ピーナッツ」、関前村の「だんだん」、湯布院町の「yufu」など地域の特産品や方言など、地域性を生かしたその地域の住民になじみの深い名前を用いている場合が多く見られる。

## 3. 地域通貨「Pote」の流通実験

### 3.1 学内での流通実験について

2002年度に、九州大学箱崎地区内での流通実験を行った。<sup>(2)</sup>

九州大学で地域通貨が流通すると仮定した場合、以下の2点の特徴が想定された。

#### (1) 大学生のライフスタイルを考慮

必然的に参加者は大半が大学生となることから、学生の活発なアクティビティに対応できる地域通貨が望ましい。形状としては、最も流通の仕組みが単純なクーポン発行形式が適していると思われた。また、多くの学生はコンピュータや携帯電話でのインターネットを日常的に利用しており、それら情報技術を活用した地域通貨の導入の可能性も検討した。

#### (2) コミュニティ施設が存在

九州大学キャンパス内に、学生ボランティアスタッフにて運営されているコミュニティ施設「カルチャーカフェ」がある。日夜多くの学生が利用している上、ボランティアで運営されている点も地域通貨導入の大きなメリットになると考えられる。

### 3.2 地域通貨「Pote」の概要

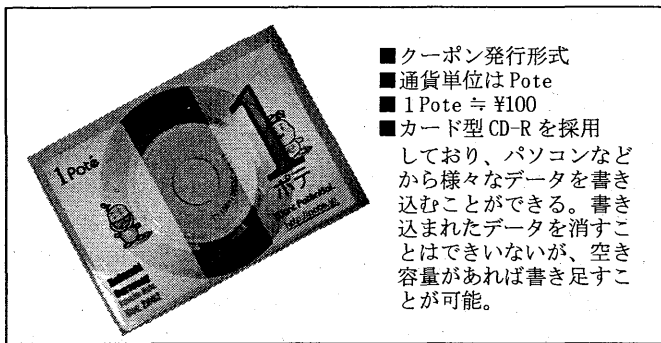
以上の事由を考慮して検討した結果、次の特徴を持つ地域通貨「Pote (ポテ)」を考案し、流通実験を行った。

#### (1) 通貨単位：Pote (ポテ)

通貨単位については、覚えやすく地域性のあるものという条件のもとに検討し、既往の地域通貨の例

表1 世界各地の主な地域通貨システムとその類型<sup>(4)(6)</sup>

形式	地域通貨システム			時間預託・貯蓄システム	
	クーポン発行形式	口座変動形式	借用証書形式	クーポン発行形式	口座変動形式
発行主体	発行委員会/事務局	個人(登録委員のみ)	個人	発行事務局	登録委員の
結算の方法	交渉による結算/市場により決定	交渉による結算	交渉による結算/市場により決定	すべてのサービス1時間を1点と換算	すべてのサービス1時間を1点と換算
流通範囲	地域内	コミュニティ内	システムによる制限なし(運用側による制限可)	コミュニティ内	コミュニティ内
国内の実験例	おうみ(草津市) r(東京都)	ピーナッツ(千葉) ガル(志小牧市) yufu(湯布院町)	MAT清算システム(全国) えどがわつと(東京都) yufu(湯布院町)	ボランティア 労力銀行(全国) だんだん(関前村)	NALC(全国)
海外の実験例	イサカアワーズ(アメリカ) RBT(アルゼンチン) トロントドル(カナダ)	LETS(イギリス・カナダ) SEL(フランス) 交換リング(スイス・ドイツ)	トラロック(メキシコ)		タイムダラー(アメリカ) 時間銀行(イタリア)



- クーポン発行形式
- 通貨単位は Pote
- 1 Pote = ¥100
- カード型 CD-R を採用しており、パソコンなどから様々なデータを書き込むことができる。書き込まれたデータを消すことはできないが、空き容量があれば書き足すことが可能。

図1 地域通貨「Pote」

に倣い、九州大学の学生が地元で呼ばれていた愛称「いも九」（いも = Potato）と、可能性という意味の英単語（Potential）から、「Pote」と命名した。

(2)カード型 CD-R を活用した紙幣

最も取引が容易なクーポン発行形式を選択したことは先述したが、その紙幣の形状として名刺サイズのカード型 CD-R を考案し、採用した(図1)。この CD-R は、パソコンなどを用いて中に 64MB のデジタルデータを書き込むことができる。これは、紙幣の額面とは全く無関係の要素ではあるが、流通するたびに参加者により蓄えられたコンテンツが、個々の紙幣の付加価値を生むことを想定して考案した。

コンテンツの例としては、自作の音楽データや研究発表の媒体、店舗やホームページの広告、そして

表2 「Pote」で想定される取引

享受	学生	カルチャーカフェ	箱崎商店街
提供			
学生	■余剰財取り引き	■イベントの手伝い ■チラシ作り ■家具作り	■ホームページ制作 ■清掃 ■子供の家庭教師 ■コーヒー等提供
カルチャーカフェ	■コーヒー等提供 ■場所提供		■広告枠提供
箱崎商店街	■飲食・クリーニング・物品購入など	■飲食・クリーニング・物品購入など ■食材の仕入れ	■材料の仕入れ

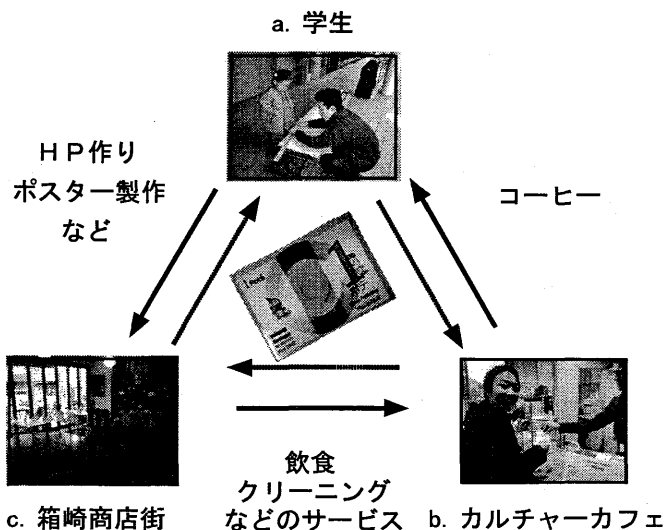


図2 「pote」の流通イメージ

地域通貨を使って受けることのできるサービス・リストなどを想定した。

また、当初意図していなかったことではあるが、この CD-R の製造コストが1枚¥100程度であるため、経済的な抑制がかかり、クーポン発行形式の懸念事項であった偽札対策を考慮する必要はなくなった。

3.3 「Pote」の流通モデル

想定された「Pote」の取り引きモデルは表2に示す通りである。更に、具体的な流通イメージは図2に示す通りである。この場合の流通とは、学生がカルチャーカフェで使った Pote を、カフェのスタッフが商店街で使用し、更にその Pote で商店街が学生にホームページ制作等の仕事を委託する、といったサイクルが成立し、三者間を循環した Pote が、普段はほとんど接点のない学生-商店街間のコミュニケーションを誘発することを想定していた。

3.4 「Pote」の流通実験

流通実験は 2002 年 12 月より参加者を募り、2003 年 1 月から流通を開始した。参加人数や「Pote」の発行数は表3に示す通りである。

表3 「Pote」流通実験基本データ

実験開始日	2003. 1. 1
参加人数	29(人)
総発行ポテ数	145(Pote)
円換算額	14,500(円)

(1)参加人数

大学構内にポスターを掲示し、一般に募集をした他、研究内容上興味を持っていることが予想される分野の研究室に勧誘を行い参加者を募った。

また、箱崎商店街や行政関係者からも数名の参加があった。2003 年 1 月流通時点での参加者は 29 名であった。

(2)発行機会

「Pote」の発行枚数は通貨流通のコミュニティの参加人数によって変わるよう、一律に「参加人数×5ポテ」と設定した。参加者はメンバー登録時に¥500を支払い、5ポテを受け取ることとなる。これにより、最終的な総発行ポテ数は145ポテとなった。

3.5 実験結果と分析

2003 年 2 月末日での取引実績を表4に示す。2ヶ月間行われた取引は総計 42 ポテとなり、予定していた総量を大幅に下回る額となった。

実施過程中的調査を含めて考察すると、その理由は以下の点に集約できる。

表4 「Pote」流通実験における取引実績

利用者	取引相手	取引内容	支払額 (Pote)
学生 (複数)	カルチャーカフェ	コーヒー	1 × 12
カルチャーカフェ	学生 A	本棚製作	20
カルチャーカフェ	学生 B	ポスター製作	10

表5 CD-R 内に書き込まれていたデータの種類と内容

データ形式	内容	受け渡し相手	件数
画像	イベントの写真	友人間	2
ソフトウェア	ウイルス除去ソフト	研究室	1

(1) 学生の活動時間帯の限定

大学構内をその流通の主たるフィールドとしているために、週末などでの利用が低調であり、平日しか取引が発生しなかった。また、大学が試験休暇期間に移行したため、主な取引場所であったカルチャーカフェも休業となり、実質1ヶ月弱しか取引が行われず、実質的に当初の想定より短縮された流通期間の短さも影響した。

(2) 学生間の取引ニーズの不一致

開始時点では、流通実験への商店街の参加が明確に決定していなかったため、主に学生間での取引に限定され、立場の同じ者同士の取引となったため、地域通貨を用いてサービスを受ける際のニーズがほとんど満たされなかった。

(3) コミュニティへの帰属意識の不足

一律¥500を支払い、学生にとっては実質コーヒー券として扱われる利用形態が中心となっていたため、学生各々が、自分で提供できるモノやサービスでコミュニティに参加できるという自覚を持つ環境が十分整っていなかった。

3.6 課題点と解決策の考察

以上の流通実験の結果より、地域通貨が有効に流通するためには少なくとも以下の課題点の解決が必要であることが明らかとなった。その解決策に関する考察もあわせて整理をすると下記の通りである。

(1) 参加者の多様性

地域通貨の流通には、生活時間帯や必要としているもの、提供できるものが異なる、多様な立場の参加者が必要不可欠である。

(2) 認知度と理解度の深化

コミュニティの参加者に「地域通貨＝クーポン券」という短絡的な概念を持たせないように工夫すること。適時、ヒアリングやワークショップなどを通じて、地域通貨への認知度などを調査し、動向に対応する必要がある。

(3) 通貨発行量の調整

発行量は、参加人数により一律に変化するものではなく、取引の実態に合わせて発行されるべきである。

(4) 通貨のコンテンツの工夫

媒体にCD-Rを使用した結果、3枚の「Pote」にデータが書き込まれていたが(表5)、この形式の通貨の活用を増やすためには通貨に記録されるコンテンツの提案も行っていく必要がある。

4. 箱崎商店街における地域通貨モデルの検討

4.1 箱崎商店街の概要

上述の地域通貨に対する研究、および流通実験結果とそれにより得られた課題を踏まえて、近年来街者が減少し、活性化の方策を模索している箱崎商店街で地域活性化に有効な地域通貨モデルのあり方を検証し、モデルを構築していくこととする。

箱崎商店街は、南北に約500m伸びる「新SUN道」と、東西に伸びる「きんしゃい通り(写真1)」からなる約100店舗を擁する規模の商店街である(図3)。秋には博多三大祭りの一つ「放生会」が行われる筈崎宮を中心として古くから栄えてきた歴史のある門前町でもある。

4.2 現状と課題

近年マンション開発が進み、また郊外への大型店舗の進出などから、シャッターを降ろす店舗も少なくない。13,000人弱の人口を有するものの、近隣に九州大学があるため若い単身世帯が多く、世帯あたり人員は1.69(人/世帯)と、福岡市東区平均の2.28(人/世帯)を大きく下回り、さらに高齢単身世帯(65歳以上の単身世帯)の割合は7.04%(<sup>3)</sup>)と、同平均の5.35%を上回る。

それでも4年前までは二つの通りの交点であり、商店

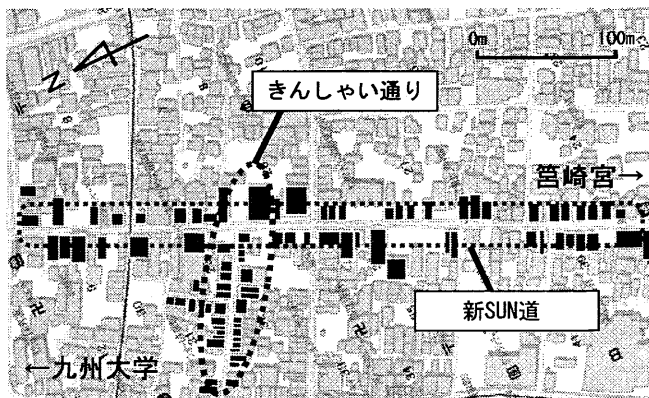


図3 箱崎商店街の位置図



写真1 きんしゃい通り



写真2 きんしゃい公会堂

街の中心である位置に大型スーパーがあったため、近隣の住民もそのスーパーとの関係で商店街で買物をするという購買パターンが多く見られたが、スーパーが撤退し、同時に駐車場も無くなったため、来街者の行動パターンと流れが変わり、箱崎商店街を訪れる買い物客は激減した。

また上述の通り、周辺には学生の単身世帯が多く居住し、学生のほとんどは商店街を生活圏として利用しないため、地元居住者の地元商店街での購買力は比較的低いことが特徴である。

### 4.3 地域活性化と地域商業活性化の連動の検討

以上のように厳しい立地条件と経済状況にある箱崎商店街であるが、その反面地元の店主や居住者らの危機意識は強い。商店街68店舗からなる商店連合会や、NPO 団体が一緒に、様々な地域活性化事業を行っており、地域通貨を媒体として活用することで、近年の地域のコミュニティ活動と連動した地域商業の活性化の方策が検討されている。

地域活性化事業の内、地域通貨の利用が見込まれる事業として、①生涯学習教室(写真2)の支援<sup>(2)</sup>、②公衆トイレ等の公共施設の管理運営<sup>(3)</sup>、③店舗等のホームページ導入の補助<sup>(4)</sup>、④宅配サービスの支援<sup>(5)</sup>等が挙げられる。

特に、高齢者の単身世帯(独り暮らし)が多い地区であるため、買物客の宅配に対する要望は以前から高かったが、宅配を取り扱うかどうかは個別の店舗の対応によって様々であった。現在、その宅配サービスを複数の店舗で統一して行う計画が立てられており、地域通貨がその媒体として役立つ余地がある。

### 4.4 商店街における地域通貨の基本構想

#### (1)想定される取り引き

以上の事業を考慮し、箱崎商店街において地域通貨を用いて想定される取り引きパターンを表6に示す。学生、商店街、NPO、地域住民の4者間の取り引きとなるので、3章での課題点を踏まえ、参加者相互のニーズの一致機会を増やすために、多様なタイプの参加者

表6 箱崎商店街で想定される取引

享受/提供	学生	商店街	NPO	地域住民
学生	■余剰財取り引き	■宅配サービス ■トイレ清掃 ■HP更新	■PC講師 ■ボランティア補助	■PC修理 ■買物代行 ■子供の家庭教師
商店街	■飲食・物品購入等サービス	■材料の仕入れ	■飲食・物品購入等サービス	■飲食・物品購入等サービス
NPO		■人材派遣		■介護サービス ■子供の相手
地域住民	■引越しの手伝い ■料理指導	■店番	■ボランティア補助	■犬の散歩 ■ベビーシッター ■余剰財取り引き

を必須条件として想定している。

この想定の下では、学生は地域通貨を介して、普段ほとんど関わることのない地域コミュニティに対してあらゆる社会参加が可能になり、学生の社会活動に対する啓発と参加の活性化にも貢献することを想定している。

#### (2)ワークショップの実施

3章での課題を踏まえ、流通実験の準備段階として、参加者の地域通貨への認知度や理解度を深めるために、箱崎商店街において地域通貨のワークショップを企画し、2003年11月に実施した。参加者は地元の店主や、NPOのメンバー、まちづくりに興味・関心がある主婦や学生など25名で、内容は①地域通貨を分かりやすく体験するゲーム、②世界の地域通貨事例紹介、③参加者による座談会で構成した。

ワークショップ終了後に調査したアンケートによると、ワークショップ実施前に地域通貨について知っていた参加者は4名だったのに対し、終了後は14名まで上がり、箱崎地域通貨の流通実験に参加したいという人数は半数以上に及んだ。結果として、3章の課題として挙げた認知と理解を深め、コミュニティへの帰属意識を高める上で効果的であったと言える。

#### (3)通貨形式の検討

今後、ワークショップなどで地域通貨について興味を持ったメンバーを集め、箱崎の地域通貨モデルを構築していくこととなるが、3章での九州大学における流通実験結果による課題点から、安易に人数によって通貨を発行するクーポン発行形式よりも、先に取り引きが発生して初めて通貨が自発的に発行される信用証書形式の方が、商店街には受け入れられやすいことが推測される。

### 4.5 仮定される地域通貨モデルの条件

#### (1)信用証書形式の採用

3章での課題考察と以上の構想に基づき、箱崎商店街での流通実験に使用する地域通貨モデルの条件を提示することとする。最終的には通貨単位などは今後のワークショップなどの参加型のプロセスを経て決定すべきであるが、本論文においてはPoteの流通実験を経た結果から以下の条件を提案する。

通貨形式としては、信用証書形式の地域通貨を採用する利点に言及しておきたい。同形式としては、ワット清算システムやyufuが有名である。この形式の地域通貨は、取引の発生時に支払う者が自分で通貨を発行する点の特徴である。つまり、将来的な自分の労働や財の提供を担保とした通貨を発行することで、

その場でのサービスと引き換えることが可能となる。サービス先導型の地域通貨であるため、より取引は活発化されることが想定される。

その場合、本通貨には以下のような情報が記載されることとなる。

- ①額面
- ②発行者情報  
(連絡先など含む)
- ③担保となる自分のサービス内容



図4 提案する地域通貨のイメージ

## (2)柔軟な発行機会の調整

現在、運営されているこの形式の地域通貨は参加者がその場で地域通貨を発行することを可能としており、その点で事務局などが不要となるなどのメリットがある。しかし、今回は実験であり、取引状況を正確に把握しておく必要があることから、参加者は参加用紙やインターネット上で自分の提供できるサービスや額面などを申請し、地域通貨の交付を受けることを条件として通貨を設定する必要がある。

なお、通貨の発行費用やその他の運営コストは、通貨の裏面に参加店舗・協賛店舗の広告を入れるなどしてその一助とし、更に大学での流通実験で用いたCD-Rを媒体とした場合は、広告や発行者情報などを媒体自体に入れることができるメリットもある。

## (3)コミュニティ・ビジネスの支援機能

また、地域通貨には空き店舗を利用したチャレンジ・ショップやコミュニティ・ビジネスの活性化の効果も期待されているが<sup>7)</sup>、地域コミュニティに深く関わっていくことができる効果に加え、広報ツールとして使えるメリットも備えた当地域通貨のモデルは、コミュニティビジネスの土壌育成などの効果も期待できる。地域特性にも適応した活性化方策として、流通実験から得られた課題点より導き出された事項を満足させるモデルとなっており、今後の流通実験で効果が発揮されることが期待される。

## 5. おわりに

今回の研究では、地域通貨の先進事例をレビューして整理、類型した後に、九州大学での流通実験を実施し、実験に基づく検証とそれにより得られた課題等の知見から、箱崎商店街で計画している流通実験の計画段階における地域通貨の基本構想と通貨モデルを立案した。

今後の展望として、2003年末より限定的にはあるが流通実験を開始する予定である。この実験を通じて得られた結果もまだ初歩的段階である地域通貨の流通システムの確立に向けて、データ蓄積を進め、

改善を重ねることで、商店街活性化に相応しい地域通貨のモデルを構築して行く必要がある。

## 謝辞

なお、本研究の流通実験は、九州大学チャレンジ&クリエイション(C&C)の研究助成を受けて実施した。関係各位に感謝申し上げたい。

## 脚注

(1)今回参照した既に運営されている地域通貨の情報源として、文献1)の他に地域通貨運営団体のホームページには下記のものがある。

地域通貨フォーラム

<http://www.ccforum.jp/index.asp>

ワットシステムズHP

<http://www.watsystems.net/index.html>

地域通貨おうみ委員会HP

<http://www.kaikaku21.com/ohmi/>

アースデイマネーウェブサイト

<http://www.earthdaymoney.org/>

千葉まちづくりサポートセンター

<http://www.jca.apc.org/born/>

苫小牧交換リング「ガル」HP

<http://city.hokkai.or.jp/~ishikoro/garu.html>

地域内取引システム「yufu」HP

<http://www.coara.or.jp/~yufukiri/letsyufu/>

グリーン電力証書「えどがわっと」HP

<http://oal45309.awmi2.jp/page-225.html>

NPO法人NALCホームページ

<http://nalc.jp/>

(2)計画時点では地元の商店街である箱崎商店街での実験も予定していたが、商店街側との準備が十分でなかったため、本実験を商店街での流通実験の予備実験と位置付けて実施した。

(3)2000年国勢調査による。

(4)きんしゃい通りでNPOが運営しているパソコン教室「きんしゃい公会堂」があり、インターネットの使い方やメールの書き方など、初歩的なことを教えている。ただ、その一方で限られた予算内で運営しているNPOにとって、専任の講師を雇うことができず、時間の空いているものが交代で務めており、地域通貨を介した支援が想定される。

(5)商店街にトイレが欲しいという要望を受け、2003年11月に地区内に公衆トイレが設置された。ただ、現状では清掃をする者がおらず、商店街の役員が持ち回りで清掃や維持管理を行っている状況であり、地域通貨を介したボランティア活動の活用が想定される。

## 参考文献

1) 地域通貨全リスト

<http://www.cc-pr.net/list/>

2) 日本総合研究所「地域通貨を活用した地域商業の活性化に関するモデル調査事業」2003

3) 河邑厚徳、グループ現代「エンデの遺言 - 根源からお金を問うこと」NHK出版、2000

4) 坂本龍一、河邑厚徳「エンデの警鐘 - 地域通貨の希望と銀行の未来」NHK出版、2002

5) ぶぎん地域経済研究所「地域通貨の経済的効果(試論)」2002

6) あべよしひろ、泉留維「だれでもわかる地域通貨入門/未来をひらく希望のお金」北斗出版、2000

7) ぶぎん地域経済研究所「地域通貨によるまちづくりとコミュニティビジネス」2003

(受理:平成15年12月4日)